甲第107号証

第九話　天皇裕仁の純真無垢

国際慣例を守った日本

「易地思之」（おかれている立場を代え、相手側から考えてみること）という四字の熟語がある。

ふと運命のごとく思い浮かんだ言葉。実にぴったりだ。

わずか一ヵ月前、金浦で私は上を、椎名は下を眺めながら出会った我われは、今日羽田で、雲をまとった私、陽炎を踏み空を見上げる椎名というふうに、その立場が逆転した。

「あの時、彼も死を覚悟していたのだろうか」

今にしてやっと私は、その時の椎名の気持ちがわかった。

窓の外を見ると管制塔の光が目に入った。奇妙なことに、飛行機が下に向かうにつれ気持ちが落ち着いた。恐らく宿命に身を任せた諦めのせいだろう。

「長官、日本警視庁から、防弾チョッキの着用を勧められましたが……」

機はいつしか止まり、延河亀アジア局長が乗り込んできてそう言った。

「いや、大丈夫です。このまま降りる」

なお心配そうな彼を後にして、私は前へ進んだ。腕時計をのぞき込むとすでに五時四十分だった。

「いやしくも歴史上初の公式訪問の韓国外務長官だ。それに六局ものテレビが生中継するというのに、あの見苦しい防弾チョッキなどを着た格好を見せるわけにはいかない」

その時までも私は内心「格好よく死ぬ場面」を考えていた。

前方を見ると、やっと訳がわかった機長とスチュワーデスが慌てているのが目についた。そしてそのそばでは、機内でずっと私の代役を務めた林明鎮が照れくさそうに頭をかいていた。しかし私もやはり人の子だった。落ち着いていたはずが、ドアに近づくにつれ再び胸がドキドキした。

「本当に鉄砲弾が飛んでくるだろうか」

はっきりと恐怖はあるのだが、なぜか感覚がない。もうすっかり私の足取りは諦めに包まれていたのだ。

ついにドアを出た。その時私は、あるいは私の心臓を貫いたかもしれぬ鉄砲弾よりも、はるかに強烈な弾頭が私の目と耳に達するのを感じた。

それはほのかな光の中に見える赤い文字の「李東元打倒」プラカードと、空港屋上が崩れんばかりの朝総連と全学連の「韓日会談決死反対」の叫びだった。

たそがれの羽田に現れた招かれざる客（？）を迎える日本の挨拶はこんなふうだった。もちろん

広場には太極旗で迎えてくれる在日僑胞もいたが、やはりその日の雰囲気の支配者は、警察の防御線外にいた反対派だった。

「ようこそ」

椎名が私の手を握った時、私はやっとのこと同志と出会ったように緊張がほぐれた。そのころ私の気持ちのわかる日本人が、はたして椎名以外にだれがいたろうか。

続いて行われた式典行事は、一ヵ月前の金浦空港そのままだった。

礼砲、自衛隊査閲、両国国歌演奏、到着声明および歓迎の辞、そして各界の名士との握手……。

特に歓迎してくれる人の中には、我が恩師のライシャワー駐日米大使、「李東元歓迎委員会」の岸信介、賀屋ら政界の大物たちが目についた。それほど彼らが韓日会談の大事さを感じていた表れだろう。

が、何より私は羽田空港に愛国歌（韓国の国歌名）が鳴り響いたことを忘れることができない。この点だけが金浦空港と違ったが、実際あの時こちらが「アリラン」を演奏したのでひょっとして今度は日本の伝統民謡「荒城の月」でも流れてくるのではと考えたりしたものだ。が、日本側は謝罪の意味を込めてなのか、国際慣例を守ってくれたのである。

「先の非公式訪問のときの方がよかった」

空港から宿泊のヒルトン・ホテルまでは、思った以上に時間がかかった。ソウルと違って、デモ隊の活動の自由があるせいか、そのため平素なら四十分で着くのに、私は一時間半も費やさねばならなかった。

それに防弾車特有の暑さに耐えられず、途中、警護官の制止にもかかわらず車外へ出て、洪水のようなデモの風に当たったりした。

翌日の新聞によると、デモの人だけでも数万名とか……。また、私の気づかなかったことだが、私の機が空港に着陸する時、デモの混乱を整理する間二～三回ぐるぐる回った末に着陸したという。それほどデモはすごかったのだ。

とにかくその日私は「よっぽど先の非公式訪問の時の方がよかった」と何度も心でつぶやきながら眠りにつかねばならなかった。

たぶん雰囲気の強烈さに私まで感化されたのか、二十四日私は椎名をびっくりさせるようなことをしでかした。

その日の夜八時ごろ、彼は私の部屋へやってくるや、

「李長官、これまでの努力を水の泡にしてしまうつもりですか」

と深刻な顔で言う。

それもそのはず、私はたった今、日比谷公園の「日韓会談糾弾大会」に何人かの警護員だけ連れて行ってきたところだったのだ。そのうえ、私は群衆の間にまじって「米帝の手先朴正熙・李東元打倒」を一緒に叫ぶ客気まで吐いたのだから、椎名の驚きぶりも無理からぬことだ。

「どうか……。もし万一、李長官の身に何かがあれば会談はおしまいです。二度とそんなことはないように……」

椎名の泣かんばかりの訴えで、その後私は絶対に二度とそういうことはしなかったが、それほど反対デモは私の滞在中ずっと激しかったし、若い私の好奇心は完全にその雰囲気に感化されてしまったのである。

そのせいか翌日の二十五日、半月ぶりに会った佐藤は、真っ先に意味あり気なジョークを飛ばした。

「本当に三十代ですか。うらやましいですな。私の三十代のころはまだ世間知らずの若造……」

明らかに私の日比谷行きを当てこすった言葉だ。私はそっと言い返した。

「人は実際の年齢と頭脳年齢が違う場合が多いようです。そういえば、首相と私の場合はどうだかわかりませんが……」

今にして思えば、事実当時六十四歳の彼は、私の行動を思春期の少年のそれほどに考えたとしても不思議ではない。というのも、六十代中ごろに達した今の私には、その時の佐藤の私へのたしなめがよくわかるからである。今度は、椎名と私のでなく、二十六年の時空を超えての佐藤と私の「易地思之」（立場を代えて考えること）だと言える。

私の意地悪

しかし何といっても、東京訪問の中心は天皇との会見だろう。

帰国前日の二十六日は、朝から妙な気分だった。

「幼いころ、中学に通うころまでも、毎朝東の空に向かって礼をし『皇国臣民の誓い』を唱えさせた張本人、一時は現人神とまで崇拝された裕仁に会うとは……」

万感胸に迫り、一方、どんな人物だろうかという不安もあった。

午前中の第三回外務会談を無事終え、宿所に帰ってきた。食後、椅子に座ってつくづく考えてみた。

「ここでは崇拝される天皇かもしれないが、我われにとっては苦しみを与えた張本人だ。何とか、表に現れない形で我われの気持ちを伝える方法はないものか」

例の虫（？）がまた騒いだのだ。だが、公式訪問だし、ここは日本の地だ、私が何をどうできるというのか。やはり妙案は浮かばない。

すでに二時三十五分。五分後には出発だ。頭の中はいぜん、アイディアなし。

ドアのノックの音に振り向くと、李炳豪秘書が同行する椎名が来たと知らせる。瞬間、パッとひらめくものを感じた私は席を立った。

私は突然、

「あ、ちょっと、急に腹が……」

と言ってテーブルの雑誌を手にするとトイレに消え去った。

それから二、三分後、私は照れくさそうに笑いながらトイレから出てきた。むろん本当に食当たりしたわけでも、雑誌を読んでいたわけでもない。

「出発が十八分位遅れたからといってどうなるわけでなし……。我われは独立まで三十六年間も待った。数字合わせで、せめて半分の十八分、裕仁が待てないこともあるまい……」

私は意地悪をしたわけだ。

外に出ると、椎名の顔はひどくこわばっている。いくら生理現象と判断しても失礼と考えたのだろう。ヒルトン・ホテルから皇居までは二十分余りの距離というが、渋滞のため車という車がただむなしく空中にガソリンをばらまくようにムダ使いをしていた。

二つの顔をもつ日本の原型

車は二重橋を通らず横の橋から入った。橋過ぎる時、その下の堀に映る皇居は本当に美しかった。石垣を囲んで造られた堀には白鳥が悠然と泳いでおり、柳と松で囲まれた白壁の皇居は、青い空の下にそびえ立っていた。彼らの敗戦の傷跡と我われの植民地の恨みをなだめるかのようであった。

建物の前に着いて私が青々とした芝生に足を降ろすと、後続車から金東祚大使と通訳の前田利一が降りてきた。宮内庁長官が我われを丁重に出迎える。

ホールを過ぎて小さな部屋に案内された。部屋に入ると同時に私は、真向かいのドアの前に背の低いやせこけた老人が立っているのを見逃さなかった。

彼がまさしく、半世紀前、顔も知らぬ私に無数に頭を下げさせた裕仁その人だった。

初めて見る彼は写真よりはるかに小柄だった。それに肩は落ち、声は細くてかわいており、握った手に力が感じられない六十代中ごろの、ごく平凡な老人だった。

それはある意味で、私には生硬な印象だった。韓国人の感情からすると、これは矛盾だった。ひどく純朴な、誠実でおとなしく見える純真無垢なその顔は、衝撃の度を超え、想像していたのとは対極的なものおだやかな印象だった。

私は複雑な気持ちになった。公事を考えればはっきり言って彼は怪物でなければならないはずなのに、個人としての彼は限りなく多情多感な、その丸いメガネの奥の目からさえ、子供の夢が探せるくらい柔和な顔の老人ではないか。

「この人がどうしてあのひどい歴史の数かずをしでかすことができたのだろう」

まるで、二つの顔をもつ日本の原型を見る思いだった。同時に、次第に胸が開けるような気分におそわれた。

事実、私は車の中でずっと、実際会ったら憎しみが湧いてくることだろうと、そう思っていた。完全な誤算だった。純朴なその顔を見たとたん、私は憎しみどころか、むしろあわれみの情が湧いたぐらいだった。

そのうえ、完璧な美を備えた皇居に引き比べて、彼の姿は一層わびしく映る。そしてまた、その体からは実に不思議な魅力が漂っていた。

一通りの挨拶を終えた我われはソファーに座った。見渡すと、椎名と前田はいつのまにか君臣の礼に沿って、また硬い顔、態度に戻っていた。

「ようこそ、いらっしゃい」

最初の発言にしてはそっ気ない。

「ありがとうございます。朴大統領からも、陛下によろしくお伝えくださいとのお言葉がありました」

「あ、ありがとうございます」

当たり障りのない話に堅苦しい雰囲気。が、それは致し方ない。元もと無口な椎名は完全にダンマリを決め込み、通訳の前田は座ろうとせず、立ったまま空中に言葉をばらまいているありさまなのだから……。

私はそっと話題を振り向けてみた。

「陛下、皇居は実に広々として美しくて、息をするのがもったいないくらいです。でも、それだけにかえって陛下は寂しくはありませんか」

すると急に裕仁の目が輝くのが感じられた。どうしてそんなに自分のこの気持ちがわかるのかというふうな目だった。

意外と嬉しそうな目の輝き。思ったより、天皇の胸の内を開かせるのにはさほどの時間がかからなかった。

第十話　皇居に残した昭和元年生まれの笑顔

陰りを取り払ってやりたい

二十五年といえば、人の一生ではずい分長い時間だ。ちょうど二十五歳差の裕仁と私の場合、その間に大きな壁があって当然だろう。まして彼は満州事変、太平洋戦争、敗戦と、その苦労たるや、私と比ぶべくもないだろう。

ところが不思議なものだ。嘘のように我われは、まるで旧知のように自然に接した。

彼としては初めて迎える韓国の使節が息子のような年齢で、ましてや自分の時代である昭和のそれも一年（一九二六年）生まれだというから、負担に感じても不思議はない。

また、私が彼ら皇族があこがれる（？）「大英帝国」のオックスフォード出身であり、また日帝時代の人物でもなく、日本に対しては、劣等感よりむしろ堂々としているせいもあろう。

いずれにしろ、いざ会って、話が始まってみると次つぎと話題が続いた。だが話題は、いぜんとして、無味乾燥なことばかり。

「どちらから日本へいらっしゃいましたか」

「はい、数日前アメリカから参りました、陛下」

「そうですか……、今、アメリカはどんなふうですか」

私はそろそろ会話に味付けするころ合いだと見てとった。

「やはりアメリカは大きな国でした。陛下、土地も広く、人びとも大きくて……、ところで、どうしてアメリカの女性はあんなに背が高いんでしょうね。東洋の男たちには少々大きすぎるのではないかと思うのですが」

「うん？　ああ、ハハハ……」

私の言葉のニュアンスが伝わるまで若干の時間が必要だったのか、ややあって彼は急に破顔大笑した。まるでメガネが額にくっつかんばかりに豪快に笑った。

「でも陛下、アメリカはやはり外国です。それは、この日本に足を踏み入れてからますます感じました。こちらに参って、気持ちがゆったりして、やっとそれはまるで親戚の家に来た感じです」

「そうでしょう、そうでしょう」

彼は何度もうなずき、満足そうだった。

「で、これからどちらへ向かうのですか」

「はい陛下、もちろん韓国に帰ります」

「あ、そうそう！　最近のソウルはどうですか」

彼はまるで忘れていたことを急に思い出したように、慌てて話した。
「はい、ソウルは北漢山（ブクハンサン）も漢江（ハンガン）も、歴史の流れに関係なくそのままです。ただ北との戦争のせいで、南に下りてきた人が多く人口が増え、家不足で、南山（ナムサン）に箱部屋（ハコバヤ）（鮮魚や果物などの容器の箱を再利用してこしらえた粗末な家のこと。パンは漢字をあてると房で、部屋の意味）が少々できたのが変化といえば変化です」
「箱部屋？　それは何です」
彼は横の通訳に尋ねる。
「バラック……、掘っ建て小屋のことですか」
前田の説明にうなずくその顔には陰がさした。それはいかんなというふうだった。それでなくともわびしい彼の姿が、一層物悲しく見えた。
瞬間私の胸の内に、その陰りを取り払ってやりたいという欲望が湧いてきた。
「陛下、箱部屋は昼間はたしかに見すぼらしいですが、月夜の晩にはロマンチックそのものですよ」
「どうしてそれがロマンチックなのですか」
「はい。箱部屋というのは屋根だけ自分のもので、壁は共同所有だからです。つまり、壁が隣とくっついているので、隣の家のなまめかしい囁き声までよく聞こえるのですから……」
「あっ、そうですか。ハハハ……」
私が話し終わらぬうちに彼は笑い出す。

それと同時に、宮内庁長官の手は時間が来たということを知らせる。が、興にのった裕仁はそんなことに構わない。
「いいですから、気にしないで話を続けてください、李長官」
こうなると、出すぎたマネをした宮内庁長官がバツが悪くなるしかないふうだった。
「今日のことは本当にありがとう……」
こうして私は約四十分も裕仁と世間話に打ち興じた。予定を二十分も超過したのだが、それくらい屋台で聞くような私の話が楽しかったという証拠だ。
本当にそんな庶民的な話を、だれが裕仁にしてあげられるのか。恐らく、このたぐいの話を聞いたのは初めてではなかろうか。
そのせいか、彼の顔にはずっと笑いが漂っていた。が、私は彼のわびしさを取り払ったことに自分なりに満足し、話を終え立ち上がった。
裕仁はまだ物足りなさそうに、ドアまで私を送ってくれた。
「陛下、ご健康そうで何よりでございます。何卒、お元気でお過ごしください」
いつしか握った手に心残りがこもり、その顔に再び陰りが戻っていた。私はその陰りが嫌で、彼の耳に口を当て最後の冗談を言った。
「陛下、まだまだ達者でいらっしゃるのでしょう」

「もちろんです。もちろん……」
彼は子供のように嬉しく笑い、陰りを消した。私は最後にその顔に輝きが戻ったのを見て嬉しかった。
「そうだ、李長官。頼みが一つ……。帰ったら李方子（一九〇一～八九年。李朝最後の皇太子李垠妃。日本の皇族梨本宮家出身）さんによろしく伝えてください」
突然握りしめた手に力を込めて、私を見つめる。瞬間、私は忘れていた李方子のことが思い出された。
一九六三年秋、秘書室長時代に初めて会った李方子女史。年に比べて若わかしく見え、きれいな彼女は上品そのものの姿で、日本から私を訪ねてきた。
「李垠殿下は今植物人間の状態です。お願いですから朴大統領に伝えて、あの人の帰国を許可してやってください」
結局彼女は、私と一緒に朴大統領に会い、朝鮮最後の王李垠はその年十一月二十三日、夢にまで見た祖国の土を五十六年ぶりに踏むことができた。
「はい、必ず李方子女史に陛下のお気持ちをお伝え致します」
現実に戻った私は、彼に最後の挨拶をしてからその席を立つことにした。
「本当にありがとう」
名残り惜しそうにする彼を後にして、私は皇居を出た。出る時は入った時の逆の方から、私の車

はやはり二重橋の横の橋を通った。
「四十年前、あの橋では、抗日武力集団・義烈団の金祉燮（一八八四～一九二八年。一九二四年に二重橋で天皇を狙撃しようとして爆弾三発を投じたいわゆる二重橋事件を起こして逮捕）が、天皇を殺そうとして逮捕されたのだったな……」
振り向いて車から二重橋を眺める私の頭には、急に植民と独立の絡み合った韓日両国の姿がオーバーラップしてきた。
「流れゆく過去……。かつて裕仁は我が民族の敵だった……。昔、そのお陰で年少の私も日本警察に引き立てられひどい拷問を受け……。しかし今となっては忘れるべきは忘れなくてはいけない。過去を全部埋めておくわけにはいかないが、少なくとも感情にとらわれることだけはやめなければ……」
いつしか車は大通りに差しかかった。
「たしかに今日、私が裕仁に笑顔を送ったことも、独立闘士らには不愉快なことかもしれない。しかし今では、彼の寂しさの後ろには、罪よりも許しを請う人生の陰が隠れていたような感じがする。それほど年齢が彼を弱くしているということであるはずだ」
事実、感情を表に出さないという日本の皇族、それも天皇が笑って楽しんでくれたのは意外だった。それだけ年輪を重ねた証拠でもあろうか――。
私は車中でずっと色んな考えにとらわれていた。
ヒルトンホテルが目に入った。すると、それまで私の硬い表情に気おされていた椎名が思い切っ

たように言った。

「李長官、私はこのことだけは必ず言っておこうと思う。今日のことは本当にありがとう。私はこれまで何度も陛下にお目にかかったことがあるが、今日みたいに楽しそうになさるお姿は初めてだ。心から臣下として感謝する次第だ」

私は正直、ぎくりとした。私のざっくばらんな会話が、あるいは椎名の目には不敬に映ったのではないかと、内心すまないことをしたかもしれない（？）という気持があったからだ。そんなところへ、ちょうど彼が、私の気持ちをよくくんでくれた一言を言ってくれたのである。

だが、それは本当の気持ちであり、その後、私の裕仁訪問は日本政界の話題となった。

「陛下がなぜあんなに楽しそうでいらっしゃったのか」

皆気がかりな顔だったが、その内幕を知る者は日本人としては椎名と前田のみ。が、彼らが口を開かないから、やはり気がかりなままだ……。

今や、その場にいた人たちはほとんどこの世を去ったり、年を取って記憶が薄れている。それで私は残念な気持ちを込めて、裕仁との会話を公開するのである。

その後、その時の会見のせいか（？）、裕仁は私に日本の最高の勲章、勲一等を授けてくれた。しかし私は当時の反日感情を考え、遠慮せざるをえなかった。ところが日本の法と慣習によれば、天皇の下さった勲章は手続上なかなか拒否できないようになっているという。

結局、一九六八年、金山政英が韓国大使に赴任した時、代わって持参してきた。今でも私は、我

が家の壁にかかっているその勲章を見て、その時のことを思い出したりする。

「韓国民が歯ぎしりして怒っていた裕仁、しかし人間的に見た彼は、世の中のことはそれほど関心のないごく普通の素朴な老人にすぎなかった……。全く憎めぬ不思議な老人……」

天国と地獄を転々とした人生

その後漁業協定、在日僑胞の法的地位、請求権問題などを解決して帰国した私は四月初め、我が家に李方子女史とその息子夫婦を夕食に招待し、裕仁との約束を守った。

「本当にありがたいお方です」

彼女は私に向かって何度も天皇のことをそう言った。

その後も私は時どき、日本から賓客が訪れると李女史を招いてともに食事をしたりした。恐らく十回以上はそうしたと思う。

私は彼女に会うと決まって、韓日の痛々しい傷跡を見る思いがしたのを忘れることができない。

裕仁と同年に生まれ、すぐれた才能と美貌で、早くから裕仁と結婚するものと目されていた李方子女史。しかし韓日両国の政治関係の犠牲として、朝鮮の最後の王純宗の嫁として選ばれた。彼女の不幸は韓日の痛みとして永遠に残るだろう。

彼女が朝鮮王に嫁入りさせられたのは、石女（うまずめ）だったからだと言われた。しかし彼女は見事に息子を二人も生んだ。もちろん、そうなると日本の皇家の三人の医者は切腹自殺をしたという。朝鮮王

家を根絶やしにしようという日本の陰謀の、今一つの犠牲となったわけだ。
李方子女史の不幸、いや韓日間の歴史の陰謀はこれで終わらなかった。
ところが、李垠の長男は生後八ヵ月で急性消化不良か毒殺かわからぬ謎の死を遂げた。
「玖、お前だけは決して朝鮮の土を踏ませないからね」
一九三一年の暮、次男玖を生んだ李女史はそう決心した。
だが、戦後、ただ一人の肉親の玖は母の決心のせいか、韓国でなくアメリカへ渡り、そこでドイツ系のアメリカ人女性と結婚してしまう。こうして朝鮮王朝の純血は完全に途絶えてしまうのである。その後玖は、この女性とも別れ、素性のあやしげな占い師の日本人女性と同棲しているというよからぬ報道が、一時日本の写真週刊誌をにぎわしたことがある。
苦難はまだ終わらない。日本にいた李垠と李方子は、平民にまで身分を格下げされ、解放後（戦後）長く故国行きを望んだが、大韓帝国時代に投獄体験のある李承晩によって冷たく拒絶された。一時自分が大君系（大君は国王に準じる。李王家の傍系）だと自慢していた李承晩は、親戚とも言うべき彼ら夫婦の帰国を先頭に立って遮ったのだ。
心のふるさとまで失った李垠は、その後経済的困難まで体験する。
日本皇族中最も豊かだった彼らは、その屋敷（現赤坂プリンスホテル）までだまされて西武グループに乗っ取られ、さらに裕仁が毎月与えてくれる十万円の御賜金をもらい受ける身となった。
「天国と地獄を転々とした人生」

その言葉がぴったりだ。
それでも彼らにとって、一九六一年の五・一六軍事革命は暗黒の中の光であった。朝鮮最後の王李垠は、意識のない植物人間だが、国民の熱烈な歓迎でもってむかえられ、その後故郷の土に埋れた。
数年前、李方子女史が最後の息を引き取った。その時、喪家を訪ねた私のくやしさはとても言い表わせない。
韓日会談を導き、新時代を切り開いたと自負する私の目には、李方子女史の姿はつねに哀れそのものだった。
それゆえその日、葬儀家から帰る私の足取りは、やはり重いものとならざるをえなかった。
「梨畑（彼女の本名は梨本宮方子）から李畑（李王家）に嫁入りし、リンゴのような赤い情熱で、胡桃の殻のような屈曲の多い人生を生きた女性、李方子」――と、当時韓国のマスコミで表したのである。
朝鮮の垠と日本の欲望のはざまに立った彼女は、永遠に韓日両国に恥を知らしめる証人である。

韓日条約締結秘話
——ある二人の外交官の運命的出会い

一九九七年十二月三十日　第一版第一刷発行

著　者　李　東　元
監訳者　崔　雲　祥
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　〒一〇二　千代田区三番町三番地一〇
医療・研究出版部　☎〇三(三二三九)六二三七
普及一部　☎〇三(三二三九)六二三五
京都本部　〒六〇一　京都市南区西九条北ノ内町一一
☎〇七五(六六一)四四一一

印刷所
製本所　図書印刷株式会社

© Lee, Tong Won 1997 Printed in Japan
落丁・乱丁の場合は弊所送料負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-55222-6